

ギベール、エルヴェ『幻のイマージュ』堀江敏幸訳、集英社、1995(1981)。

- ・1981年刊行、ギベール当時26歳。「撮りえなかつた」さまざまな写真を主題とした本作品は、後の作品の「コンタクトシート」的作品であるが、その完成度は、ギベール自身に影響を受けた写真家ハンス・ゲオルグ・ベルガーをしてソンタグ、バルトの写真論に比肩すると称される。また本書に先立つて刊行された映像をめぐるテクストは、本書を裏返しにしたが気にするように形成されている。
- ・母と息子の結びつきのために、父の死を望む、女優に似せることをやめる
- ・それらは女性のイマージュ、禁断のイマージュ (16-17)
- ・刊行されていない母の写真、それはフィルムの固定が失敗していた空のカメラで撮影されていた (18)
- ・大きなカメラでの再撮影 (19)
- ・幻のイマージュを手掛かりに生れた、「だからこれから書く本に、図版は付されないだろう」という宣言 (19)
- ・レコードのジャケット、映画のスチール写真 (21)
- ・嵐の海岸の写真

写真とは、何もかも飲み込み、忘れていくような行為だからであり、書くことはメランコリックな実践であって、写真はこれを妨げることしかできない。 (26)

- ・クラウディア・カルディナールのヌード写真
- ・祖母に、無用のものとされた家族写真
- ・スタジオで撮影される、俳優たちの写真
- ・家族写真において、小さな写真たちと60年代には大きな写真たちがある。結婚後も遺された父親だけの写真箱には、結婚前の男の物語がある。「合法的なカップルにエロティックな写真があるとすれば、この二つの箱の間のノーマンズ・ランドにちがいなく、封筒や本の頁、どこかの箱の二重箱に隠されているはずである。いずれにせよ、それらは男の所有物でしかありえない。写真による家族の物語は、穴をしっかりとふさがれ、首尾一貫した、不等号のないも乗れなければならず、基地の自自公以外は、何一つ察せられてはならない。こうした物語は、家族から家族へ、世代から世代へと、絶えることなく反復される」 (37-38)
- ・「水着姿の写真たち。幸せそうな、一時的に解放された身体が捉えられているのだが、それは家族の枠内に限られ、外部への逃避も、交換も、流通もない。」 (38)
- ・写真にあるのは、思い出を作っている物語と絶対に交わらない物語なのである。 (38)
- ・「家族写真の存在理由は、思い出を残しておくことだといわれる。しかし家族写真が作り出しているのは、思い出に取って代わり、思い出尾を覆い隠す映像なのだ」 (40)
- ・父親の写真よりも、子どもたちの撮った写真の方が優れており、フリードランダー、もハイ・ナジ、ブーバの写真を思い起こしさえする。 (42)
- ・より意義深い写真の謎は、写真の裏がわに記された文字たちにおいて、場所や日付や年齢

や地理的情報や家族構成ではなく、母の手による死の記録にこそ見出される（43）

- ・父の写真に、父の髪（43-44）
- ・ギベールが渴望するのは、血のつながりを再検討するような「他人」の写真、家族の物語を上書きするような人物の写真（44）